

〔報 告〕

## 父親の子育て参加の実態とその関連要因 —K町の母子保健連絡会のアンケート調査から—

矢倉 紀子<sup>1)</sup> 原口由紀子<sup>2)</sup>

### はじめに

厚生省のキャンペーンでも『育児に参加しない父親は父親とは呼ばない』と訴えるなど、母親の就業率の向上や子どもの健全育成の上から子育てを夫婦で行うことが強調され、そのことにより母親の育児不安が軽減でき、育児への自信に繋がるなどの有効性が確認されている<sup>1)~5)</sup>。しかし、その一方では、従来の日本型性別役割に従い母親のみが育児を行い、必ずしも父親の育児参加が定着しているとは言えない現状である。育児の楽しさを実感し意義あるものと認識できる母親が半減し、反対にストレスフルなものであり孤立感をもつ母親が増加していることが指摘され<sup>1)6)</sup>、少子化の危機感もあり子育て支援を社会システムとして構築する努力が続けられている。その一方で、父親の役割が問い直され、父子関係のみならず母親を含めた三者関係の中でどのような父親行動が求められるのか検討され、乳幼児期の父親の役割が明かにされた<sup>1)6)</sup>。そこで、今回、ある小さな一自治体において、このような現状をふまえた母子保健計画を立案するための基礎資料を得る目的で調査が開始された。なお、本調査は幼児から中学生に至るまでの小児を対象とした生活実態調査と併行して実施され、その実態を踏まえた子育てを各々の立場でどう担うべきか検討しようとした調査の一部をまとめたものである。

### 方 法

鳥取県西部のK町において、1歳6カ月から中学生の子どものいる全家庭である607家庭(内、母親のいない家庭5)の父親、母親に対して、育児観や育児状況に関する同じ内容のアンケート調査を留め置き法により1998年5月に行なった。K町は東西に細長い地形をなした面積40.14km<sup>2</sup>、人口7,100人、1,852世帯の比較的小規模の町である。東側には国立公園大山山麓に連なり、北西部は商工都市米子市に接し、町の中心から米子市街地まで10kmの距離にあるため住宅団地の開発が活発で、ベッドタウン化し、人口増加が続いている。産業は第2種兼業を中心とした農業が43%、その他は大半が勤労世帯である。アンケートの内容についてはK町母子保健連絡会で検討し、配布・回収はK町保健委員を通じて行った。母子保健連絡会とは保健福祉課、教育委員会、町内小中学校養護教諭、保育所の保育士、歯科医師、小児科医師(大学医学部)、保健所、主任児童委員、住民代表、著者らにより構成されたK町の母子保健事業を企画検討するためのものである。

本報告の分析対象は、第1子が該当年齢である父親についてのみ分析対象とし、有効回答数は428名中402名(93.9%)であった。父親の年齢は、30歳代が最も多く49.0%、次いで40歳代が38.1%であり、職業は勤務者が最も多く79.9%、自営及び農業が11.7%であった。また、家族形態は核家族率が38.8%、母親の就業状況は常勤者40.0%、パート19.2%、無職18.4%であった。統計は $\chi^2$ 検定を用いた。

<sup>1)</sup>鳥取大学医学部保健学科

<sup>2)</sup>前鳥取県西伯群岸本町役場(現鳥取大学医学部保健学科)

表1. 父親の子育て参加状況

	子育て参加度					子どもと過ごす時間				
	大いに する	まあま あする	あまり しない	全くし ない	無回答	2時間 未満	2~4 時間	4~6 時間	6時間 以上	無回答
	人(%)									
中学生 N = 107	22 (20.6)	41 (40.0)	30 (28.0)	2 (1.9)	12 (11.2)	48 (44.9)	36 (33.7)	9 (8.4)	1 (0.9)	13 (12.1)
小学生 N = 187	45 (24.1)	75 (40.1)	39 (20.9)	4 (2.1)	24 (12.8)	72 (39.5)	75 (40.1)	18 (9.6)	2 (1.1)	20 (10.7)
幼児 N = 108	22 (20.4)	53 (49.1)	18 (16.7)	0 (0.0)	15 (9.3)	38 (35.2)	44 (40.8)	9 (8.3)	1 (0.9)	16 (14.8)
	子どもとの話し合い頻度					子育てについての夫婦の話し合い				
	よく話 す	時々話 す	殆ど話 さない	全く話 さない	無回答	よく話 す	時々話 す	殆ど話 さない	全く話 さない	無回答
	人(%)									
中学生 N = 107	14 (13.1)	65 (60.7)	13 (12.1)	3 (2.8)	12 (11.2)	20 (18.7)	57 (53.2)	14 (13.1)	2 (1.9)	14 (13.1)
小学生 N = 187	60 (32.1)	85 (45.4)	16 (8.6)	2 (1.1)	24 (12.8)	47 (25.1)	89 (47.7)	24 (12.8)	4 (2.1)	23 (12.3)
幼児 N = 108	34 (31.5)	40 (37.1)	12 (11.1)	1 (0.9)	21 (19.4)	23 (21.3)	55 (50.9)	15 (13.9)	2 (1.9)	13 (12.0)

## 結果

### 1. 子育て参加の実態

父親の子育て参加程度を、『お父さんは子育てに参加している(参加してきた)と思いますか』の問に対して、「大いに」「まあまあ」「あまり」「全く」の4件法で回答を求めた(表1)。「大いに」参加している父親は3群ともほぼ同じ程度の約2割を占めており、「大いに」と「まあまあ」を含めた回答者は、中学生群で60.6%、小学生群で64.2%、幼児群で69.5%と子どもの年齢が低い程、参加率が高くなっていった。一方、「全く」参加しないとすものが、中学生群と小学生群に数%認められた。

平日、睡眠時間を除いて父親が子どもと過ごす1日当たりの時間は中学生群では「2時間未満」と回答したものが最も多く、44.9%、幼児群と小学生群では「2~4時間」が最も多く、約40%であった(表1)。

子どもとのコミュニケーションの程度について、「よく話す」から「全く話さない」までを4件法で回答を求めた。「よく話す」は幼児群、小学生群が高率で30%台、中学生群で13.1%であったが、一方「殆ど話さない」と「全く話さない」を合わせた話さない

父親が何れの年齢群にも十数%みられた。

子育てについての夫婦間の話し合いの頻度について、同様に4件法で回答を求めた。子どもの年齢による差は殆どなく、「殆ど話さない」が10%台、「全く話さない」が2%台であった(表1)。

しかし、以上の何れの項目についても、子どもの年齢による統計的有意差は認められなかった。

次に家事を含む子育てに関係する8項目を示し、この項目に対しての無回答者を除く父親の参加率をみた(図1)。その参加率の高い項目は「子どもと遊ぶ」「しつけ」「子どもの世話」であり、低い項目は「家事」「妻へのねぎらいの声かけ」であった。子どもの年齢により顕著な差がみられた項目は、「子どもと遊ぶ」で幼児、小学生で約70%以上と高率であり、中学生で39%に減少していた。逆に「学習の面倒を見る」は中学生が最も高く33%、小学生25.8%、幼児10%と年齢が高い程高率であり、その他の項目では、「妻の相談相手になる」が逆に中学生がやや高率となっていたが、顕著な差が見られるものはなかった。

さらに、子育てに対する相談相手を複数回答で求めた。断然多かったのは「妻」で81.6%、次いで「友達」6.6%、「自分の両親」3.7%、「妻の両親」1.6

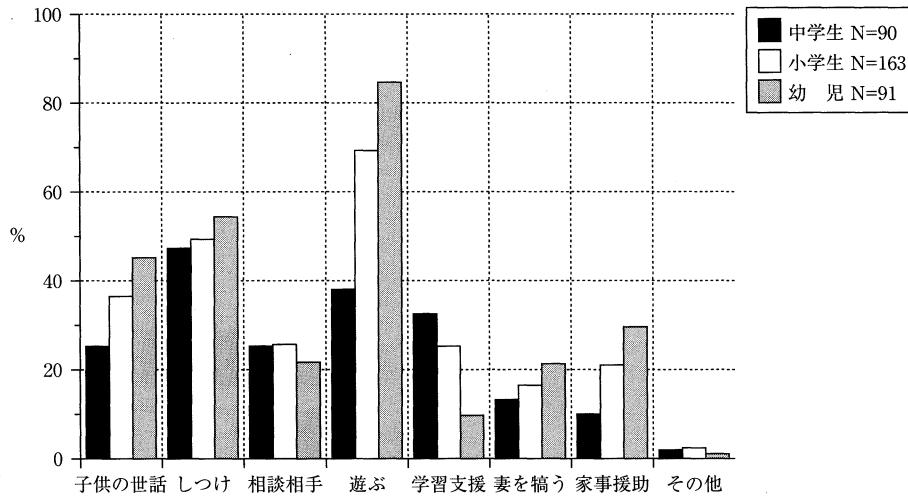


図1. 育児・家事の内容別参加率

表2. 父親の子育て感

	子育てに対する気持ち				
	大いに楽しい	楽しい	普通	楽しくない	無回答
中学生 n = 107	2 (1.9)	21 (19.6)	62 (57.9)	6 (5.6)	16 (15.0)
小学生 n = 187	22 (11.8)	39 (20.9)	93 (49.7)	7 (3.7)	26 (13.9)
幼児 n = 108	11 (10.2)	34 (31.5)	42 (38.9)	3 (2.8)	18 (16.6)

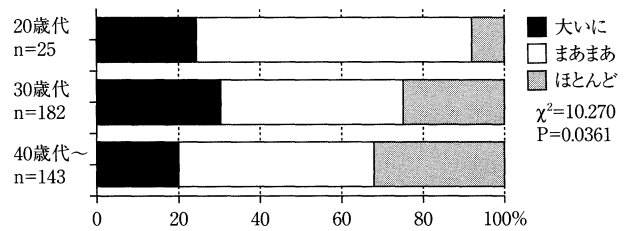


図2. 父親の年代別子育て参加度

%と「妻」以外をあげるものは非常に少なく、また「看護婦」「保健婦」「保育士」などの専門職ををあげるものはほとんどなく、「相談相手なし」とする者も7%と僅かではあるがいた。

次いで父親の子育て感について調査した。ここでいう子育て感とは、父親自身の子育てに対する気持ちを、『子育てに対するお父さん自身の気持ちをお尋ねします』の間に、「大いに楽しい」「楽しい」「普通」「楽しくない」の4件法で最も自分の気持ちに近いものを選択させたものをいい、さらに「大いに楽しい」と「楽しい」を併せたものを楽しみ群とし、「普通」と「楽しくない」を併せたものを非楽しみ群として分析した。いずれの年齢も「普通」が最も多く、中学生群 57.9%、小学生群 49.7%、幼児群 38.9%であり、「楽しくない」と感じているものが何れの群にも数%認められた(表2)。

2. 父親の子育て参加への関連要因

子育て参加の頻度を前述の「大いに」「まあまあ」

「あまり」「全く」の4段階では、「全く」が極少数であったので、「あまり」と「全く」を併せて「あまり」とした3段階でそれぞれの群の構成率を家族形態、父親の年齢、母親の職業の有無および母親・父親の勤務形態別に比較した。なお、この比較にあたっては、それぞれの項目について無回答は母数から除いて百分率を算出した。有意差が認められたのは父親の年齢のみで、殆ど参加しない者の割合が20歳代で8%、30歳代で24.7%、40歳代以降で32.2%と年齢が高い程有意 ( $\chi^2 = 10.270$   $P = 0.0361$ ) に子育てにあまり参加しない者が多かつた(図2)。家族形態は核家族と拡大家族別、父親・母親の勤務形態は常勤と農業を含めたその他で比較したが、有意な関連性は認められなかつた。

次に、『男は仕事、女は家庭』という従来の性別役割意識についての態度を肯定群、否定群、保留群に区分し、その態度群別の子育て参加度との関係を比較した。性別役割についての態度の比率は肯定群が37.7%、否定群が41.4%、態度保留群は20.9%であり、

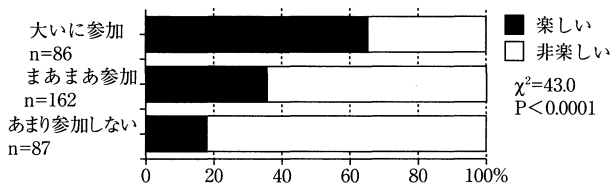


図3. 子育て参加度と子育て感

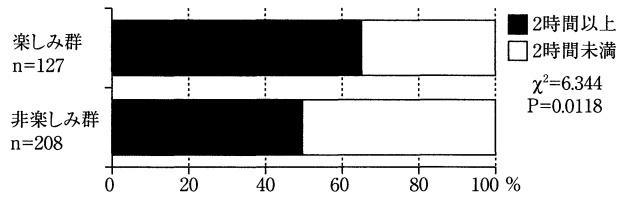


図5. 子育て感と子どもと過ごす時間

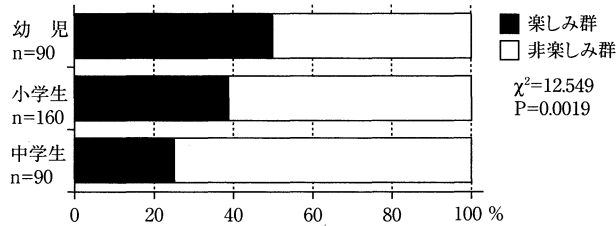


図4. 子どもの年齢と子育て感

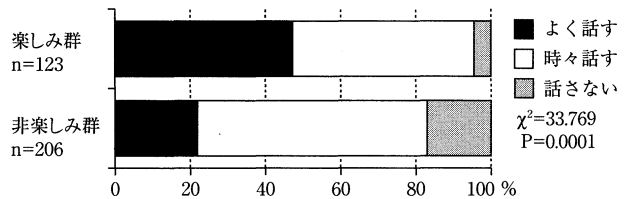


図6. 子育て感と夫婦間の話し合い頻度

各々の群別の子育て参加度を比較したが3群間で特異な傾向はみられなかった。さらに子育て参加度別の子育てが楽しいと実感しているものの割合を比較すると、大いに参加群では65%、まあまあ参加群では35%、あまり参加しない群では17%と参加頻度の高い群ほど「楽しい」子育て感をもつ者の割合が有意に ( $\chi^2 = 43.0$   $P < 0.0001$ ) 多かった (図3)。

### 3. 父親の子育て感に関連する要因

父親の子育て感の影響要因として、子どもの年齢、子どもと過ごす時間、子どもとの話し合い頻度、夫婦間の話し合い頻度および育児参加の内容などについて、楽しみ群と非楽しみ群間の比較において検討した。ここでの比較も前述の方法と同様に、それぞれの項目についての無回答者は母数から除いて百分率を算出した。

子どもの年齢群別の父親の子育て感を比較すると、「楽しい」と実感している者の割合は中学生群で23.9%、小学生群36.5%、幼児群48.5%と年齢が低くなるほどその割合は多くなっており、有意差 ( $\chi^2 = 12.549$   $P = 0.0019$ ) が認められた (図4)。

一日あたり子どもと過ごす時間を2時間未満とそれ以上に区分して比較すると、2時間以上過ごす者の割合は楽しみ群が69.6%、非楽しみ群が56.2%と楽しみ群が有意 ( $\chi^2 = 6.344$   $p = 0.0118$ ) に2時間以上過ごす者が多かった (図5)。さらに子どもと話し合

う頻度も前述の4段階のうち「全く話さない」は極少数であったので、「殆ど話さない」と併せて「話さない」とした3段階で比較すると、楽しみ群では各々38.3%、55.5%、6.2%、非楽しみ群では各々16.7%、60.8%、22.5%となり、楽しみ群に有意 ( $\chi^2 = 33.769$   $p < 0.0001$ ) に話し合う頻度の高い者が多かった (図6)。次いで楽しみ群、非楽しみ群別に育児内容別の参加率を比較した。中学生では「子どもと遊ぶ」が、小学生では「学習の面倒をみる」「妻へのねぎらいの声かけ」「子どもと遊ぶ」が、幼児では「妻へのねぎらいの声かけ」「家事への協力」についての参加率が、楽しみ群において非楽しみ群と比較して有意に高かった (表3)。

さらに、夫婦間の話し合い頻度も同様に、前述の4段階を「殆ど話さない」と「全く話さない」を併せた「話さない」とした3段階に区分し、子育て感別によく話す、時々話す、話さないの割合を比較した。その頻度は楽しみ群では各々48.8%、48.0%、0%、非楽しみ群では各々21.8%、59.2%、19.0%となり、楽しみ群が有意 ( $\chi^2 = 27.992$   $p < 0.0001$ ) に話し合う頻度の高い者が多かった (図7)。

### 考 察

近年の少子・高齢化、核家族化の中にあつて、子育て

表3. 育児の楽しみ群・非楽しみ群別の育児内容別の参加率

	中学生		小学生		幼児	
	楽しみ群 N = 22	非楽しみ群 N = 65	楽しみ群 N = 61	非楽しみ群 N = 97	楽しみ群 N = 45	非楽しみ群 N = 44
子どもの世話	27.2	21.5	37.7	36.1	55.6	36.4
子どもの躾	59.1	43.1	59.0	43.3	57.8	50.0
子育ての被相談者	22.7	27.7	32.8	21.6	33.3	15.9
子どもとの遊び	77.3 **	26.2	78.7 *	62.9	88.9	81.8
学習の面倒をみる	40.9	27.7	39.3 **	17.5	11.1	9.1
妻へのねぎらい	22.7	10.8	26.2 **	10.3	26.7 *	9.1
家事への協力	4.5	10.8	22.9	19.2	40.0 *	20.5

\* P < 0.05 \*\* P < 0.01

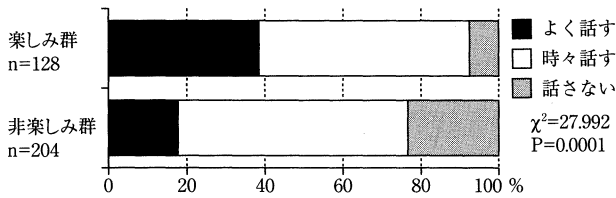


図7. 子育て感と子どもとの話し合い頻度

ての過程で担うべき父親の役割が問い直され、父親の子育てへの参加のあり方が母親自身の情緒安定に関係し、ひいては養育機能の向上に関係するばかりでなく、父親自身の育児性にまでも跳ね返ることが明らかにされている<sup>12)</sup>。しかし、これらに関する研究のほとんどは乳幼児期の父親に関するもので、児童期から思春期に至る父親に関する研究はほとんどない。本研究はK町における母子保健計画をすすめる上での基礎資料を得る目的で行ったものの一部であり、小・中学生の父親まで対象を広げているのでその年齢的な検討も試みたい。しかし、今回の調査では子どもの年齢とは関係なく一律な質問項目を示し回答させたものなので、その質問項目に含まれる意味が子どもの年齢によりかなり幅があるものと推察でき、その点での限界はあるが、あくまでも回答者自身の認識による比較として試みる意義もあると考える。

子育て参加率は60%台にあり、これは他の報告<sup>1)</sup>と類似するものであった。また、子どもの年齢が高くなる程あまり参加しない者の割合が高い傾向にあったが、父親の子育て参加を子どもの日常の世話をす

の必要性は減り、今回の結果も納得できる。

近年では直接的な世話は共働きの増加、核家族化や父親に対する具体的な育児技術、きっかけづくりに対する社会教育などの影響から、子どもとの遊びや入浴など直接的な世話が父親にも抵抗なく実践されるようになり、父親の育児参加とイコールで考えられる傾向にある。しかし、父親の子育て参加形態は直接的な世話に限られるものでなく母親の育児をサポートする間接的な側面もあり、母親はむしろその方をより期待しているという結果<sup>12)</sup>もでている。

また、子育てにおける父親の役割は、母親の代理ではなく当然父親固有の役割<sup>13)4)~6)</sup>がある。その役割発揮を動機付けるにはまず子どもと直接関わり、子育てを楽しいと実感することが重要で、父親の父親意識は母親の生物—心理的な関係を基盤として形成されるそれとは異なり、母親を通して社会・心理的な関係を基盤にその発生をみ、その上に父親行動が生じ父子関係が成立する<sup>1)</sup>ともいわれている。したがって直接的世話をするにしてもやらされているという意識や義務感だけではなく、共同して育てているといった認識が重要になるが、夫婦で子育てについて日常話し合っている者が子供の年齢と関係なく7割程度に留まっている事実や、妻へのねぎらいの声掛けをする者は非常に少数派であることなどからも主体的に子育てに参加しているとは言い難い父親の存在が推察される。

子育て参加への関連要因としては家族形態、母親の職業の有無、母親、父親の勤務形態などとの関連性

はなく、父親の年齢と有意な関連性が認められ若い父親参加度が高いことが明らかとなった。このことは人手としての必要性から子育てに参加するというより、父親の意識が年齢により変化してきていることを示すものである。しかし、その一方で性別役割意識とは関連しておらず一見矛盾を感じさせるが、これは意識と実行とは必ずしも一致しないことの一例であり、物事が何の気負いもなく抵抗もなく実践されるためには、その社会、その年代層の行動規範としての認知があつてはじめて行動化されるものである。したがって、前述したように若い世代の父親達には、育児参加が直接的な世話を中心に抵抗なく受け入れられ実践されてきたためと推察される。また、育児は母親の役割であるとする性別役割意識は現在では多様化しており、その要因<sup>17)~10)</sup>は多岐にわたり各個人によって異なるので一律に考えるべきではなく色々な選択があつてよいと考えるが、少なくとも夫婦間では、できればその夫婦の両親とも共通認識に立つて育児をすることが好ましい<sup>11)</sup>。そのことが夫婦関係を円滑にし、父親、母親としての良好な役割発揮を促し、育児を楽しみ意義あるものと捉えることができる<sup>2)4)11)</sup>。

その他の関連要因としては、子育てを楽しんでいる群の参加度が高いことが明らかとなったが、これはむしろ子育てに参加することによってその楽しさを実感することができたと捉えた方が妥当である。そのきっかけ作りとして、前述したような社会教育、キャッチコピーを使用したキャンペーンなども有効でありその効果も徐々に上がってきているが、直接的な世話のいらなくなる小学校高学年以降の父親では具体的にどう参加すべきか戸惑っている者が少なくないことも明らかとなった。

また、父親の子育てに対する悩みの相談相手はほとんど妻に限られ、フォーマルな相談システムを利用しているものはほとんどないこと、全く相談相手をもたないものも7%いることが明らかとなり、この傾向は他の報告と同様な傾向を示したが、吉田ら<sup>13)</sup>も指摘しているように仕事をもつ父親がフォー

マルな相談機関へ気軽に出かけることのできる日時の設定、自治体や小児科で実施される乳幼児健診あるいは病気受診場面での父親への意図的な働きかけなどを積極的に取り入れ、父親自身の意識の変革と行動化を促す必要性がある。

本調査結果から年長児をもつ父親の子育て参加に提言できることとしては、中学生の子どもとでも遊べる関係がもてる父親の力量形成、乳幼児期からの母親を通した社会・心理的な関係を基盤にした直接的父子関係の構築ばかりでなく、夫婦で共同して子育てをしているという実感をお互いがもち、間接的に母子関係を支援する立場をとることや健全な母子関係の発展を見守るといった役割をとることの必要性が示唆された。

## 結 論

父親の子育て参加は幼児期を中心にかなり定着し、その楽しさを実感できる父親もやはり幼児期に多く約半数は存在していることが明らかとなった。しかし、子どもへの直接的な世話以外での役割発揮は少なく、母親に情緒的なサポートまではできない父親が多数いることも明らかとなった。また、相談相手は妻がほとんどで父親へのフォーマルなサポートシステムは全く機能していないことも明らかとなった。今後、父親の子育て参加を促進するためには、従来行われてきた育児技術的な指導に限らず、学童期から思春期の子どもに対する発達理解、母親を含めた三者関係の中での父子関係のもち方、母親へのサポートの仕方など父親固有の役割発揮ができるよう、理論的・技術的な指導に限らず意識の変革も含めて健診場面、PTA活動、コミュニティ活動などの中で取り組むことの重要性が示唆された。

本研究結果の一部は、第6回日本家族看護学会学術集会上において発表した。

## 文 献

- 1) 川井 尚：育児における父親の役割，小児保健研究，51：

671—680, 1992

- 2) 大藪 泰, 前田忠彦: 乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因 III—父親の仕事中心志向と家庭中心志向の効果一, 小児保健研究, 54:54—60, 1997
- 3) 吉田弘道, 野尻 恵, 安藤朗子, 他: 育児における父親の役割と父親への援助に関する研究 その1: 子どもの心理的問題と父親の役割との関連性, 小児保健研究, 56:20—26, 1997
- 4) 吉田弘道, 野尻 恵, 安藤朗子, 他: 育児における父親の役割と父親への援助に関する研究 その2: 父—母—子—三者関係と父親の役割との関連性について, 小児保健研究, 56:27—33, 1997
- 5) 熊井利広, 佐伯裕子, 黒田由香: 育児不安と父親の育児参加の関連「子育ての社会的支援に関する意識調査から」, 日本小児保健学会講演集: 126—127, 1999
- 6) 横井茂夫, 森田英雄: 父母参加の乳幼児健診における小児科医としての実際の対応, 厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」平成6年度研究報告書: 128—131, 1994
- 7) 大日向雅美, 新道幸恵, 高野 陽: 乳幼児の親の育児に関する性役割意識 第1報母親を対象として, 日本小児保健学会講演集: 299, 1992
- 8) 新道幸恵, 大日向雅美, 高野 陽: 乳幼児の親の育児に関する性役割意識 第2報父親を対象として, 日本小児保健学会講演集: 300, 1992
- 9) 宮澤純子, 上田礼子: 性役割観とそれに関連する要因 保育園経験者から, 日本小児保健学会講演集: 100—101, 1996
- 10) 石井京子, 藤原千恵子, 日隈ふみ子: 父親の親としての意識の発達に及ぼす養育行動の分析, 小児保健研究, 57:767—772, 1998
- 11) 大藪 泰, 前田忠彦: 父親による母親の育児満足感の評価 母親の自己評定との比較, 厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」平成6年度研究報告書: 107—113, 1994